下関西高等学校　進路だより

令和７年４月号　進路指導部

知性を身につけ、当たり前にやるべきことを完璧にやろう！

今年度も君たちの進路実現の一助になればと考え、進路だよりを発行します。今まで通り**「適切な進路情報の提供」「モチベーションアップに繋がるメッセージの発信」**に努めたいと思いますのでよろしくお願いします。

突然ですが、進学希望者が多い西高生は、卒業後は**大学**という**「学府」**で生きていくことになります。しかし、**「最高学府である大学」**や**「学府」**というものが何かを正確に理解できていない生徒が多く、そのまま進学しようとしている状況に一抹の不安を感じています。そこで、改めて歴史的な背景などを踏まえながら**「最高学府である大学」**の実態について簡単に説明するので理解してください。

まず、**「学府」**という場についてですが、辞書などで調べたところ「**教育機関や学問を追求するための場所であり、一般的には知識を学ぶための施設**」「**学問に対する尊敬を示すために使用されることが多く、教育だけでなく、研究や文化交流の場**」『**学府に集まる学生や研究者は、共通の目的を持ちながら、多種多様な知識を深めたり、新しい考えを生み出したりという営みを行う**』『**学問が進化していく中心地**』とありました。ここから、**教育の重要性が高まってきている AI、グローバル時代において、「学府」の果たす役割は一層重要になってきていると理解できます。**

「学府」という言葉自体は日本発祥のようですが、**古代中国**においては、学問を教授するための官庁が存在しており、そこが日本の**「学府」**に相当していると言えるでしょう。日本では**平安や鎌倉時代**に、すでに学問を教授するための機関が存在し、その役割が時代とともに注目されてきたみたいです。特に**江戸時代**には、**藩校**などが各地で設けられ、教育の重要性が認識されるようになりました。その後、**「学府」**という言葉が誕生し、**明治維新**を経て、近代化が進むにつれ、**「最高学府」**に対しては**「大学」**という呼称が使用されるようになり、多くの学問分野が発展してきました。

さて、**第二次世界大戦後**においては、社会構造の変化とともに**「大学」**もさらに重要な役割を果たすことになります。しばしば、１９５５年以降の**高度経済成長**の大きな要因の一つとして、「**勤勉さ**」が挙げられてきました。当時から日本は多種多様なエネルギー資源や鉱産資源が埋蔵されてはいますが、量が少なく、資源の中で唯一豊富といえたものが**「勤勉で真面目な学生達」**でした。また、**当時は欧米で開発された技術を模倣し、その技術を利用して海外から輸入した資源を加工することにより、付加価値をつけて製品化し、世界市場で販売することが日本の生き延びる唯一の経済政策**でしたから、理想の**「大学生」**は高品質で安い製品を迅速に生産するために、**海外の技術を素早く理解し、上手く取り込むことのできる「工学系」の学生や効率的な販売やマーケティングを行い、資本を上手く運用できる経済・経営系の「大学生」であり、大学教育もそのシステムにあった「大学生」を輩出することを目標としていました。**個性よりも模倣、独創性よりも効率が重視され、高校教育においても暗記のスピードや量が重視されていました。また、この頃の大学進学率は低く、大学を卒業すればビジネスリーダーというポジションが約束され、大学で何を学ぶか、どんな学力を身につけるかではなく、大学を卒業したかどうかということが大事なまさに学歴社会でした。その後も経済成長は継続、さらに高学歴化し、大学進学率は年々上昇、**1980年代後半**のバブル経済では永遠の繁栄を夢みていた日本でした。しかし、**1991年のソ連崩壊後から**のグローバル化の波に

（次のページへつづく）

日本はのまれ、人件費の安い途上国に国際競争でおいて行かれ、現在は先進国の中でも所得が上昇しない、経済格差の大きな国家になっています。こうした状況下で社会が求める**「大学生」**に対する能力も変化してきています。それは、**多種多様な人の嗜好やニーズを敏感に感知する能力や従来の視点とは違う発想から流行を生み出せる個性的な能力**などです。こうした変化に合わせ、**「大学」**も**新たなものをゼロから生み出す創造性やそのひとだけに備わった独自性、様々な状況に対処する問題解決能力を重視する能力**を重視する教育・研究機関へと転換していきました。しかも、産業界は即戦力を求めており、学歴だけでなく、**どんな武器を身につけてきたかという学習履歴を重視**する傾向になってきています。だから、**学歴は重要だけど万能の武器ではなくなったという事実**を共通理解しなければいけません。だから、**君たちは何になりたいかではなく、「大学」という機関の意味をきちんと理解した上で、具体的にどんなことを学び、どんな武器を身につけたいかということを念頭に大学進学の目的を明確にして欲しいと思います。**

また、西高に在籍している間に**「自分と向き合い、自分を知り、自分と違う価値観を持つ大人ときちんと対話できる生徒」「他人と比べて自分が優れているという自負心ではない、しっかりとした足場のようなプライドを持っている生徒」**になって欲しいと思います。その上で、**「将来に活きる知性」を身につけて欲しいと思います。**ここでの**「知性」**とは**「学んだことを鵜呑みにするのでなく、時には疑うなど十分に考えようとする態度や姿勢」**のことです。そして、その**知性を発揮できる人の条件**として私は、**自分の考えだけに固執せず、相手の意見もしっかり傾聴し、最後に自分の中で『きちんと腑に落ちたか』『十分に納得したか』どうかを、セルフチェックし**、**場合によっては行動を変えることができる人であり、その条件に合う人を『知性的な人』**だと思っています。私も若い頃に先輩の先生方から、生徒に対して**「わかったふりをしない」「知らないことは知らないと言う」**正直な態度を持つようにとアドバイスを受けたことがあります。その時、私は**「わかったふり」**をすることで、**目の前の問題を自分の課題として認識できなくなる**と理解しました。その後は、他人の説明や本で読んだ内容をすぐに鵜呑みにするのでなく、**目の前の事象がなぜ起きているのかなどの背景についてぎりぎりまで考え理解するように意識しました**。特に、AI の時代においては、自分が知識や情報を多く持っているかどうかだけでなく、**「自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替える」ことができる柔軟性が、「知性」そのもの**ではないかと思います。そして、**知性を十分に身につけるには時間と労力が必要**であると思いますので、**知性の獲得**には**学習に粘り強く取り組む姿勢が何より重要**だと言えるでしょう。もう一つ**知性について注目して欲しい点**に、**知性は個人の属性ではなく、集団的にしか発揮されないという点**があります。ある人が知性のある人であるかどうかは、その人が持っている知識の量や計算力によって評価されるものではなく、その人の発言、振る舞いによって、その集団全体の知的パフォーマンスが上がった時にはじめて、「彼は知性的な人だったよね」と高く評価されるのです。だから、個人的な知的能力は高くても、その人がいると集団から笑いや新しい提案が無くなり、集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合には、その人は「反知性的な人」となると思います。だから、**一人一人が学校やクラスの中などの集団での発言や振る舞いが集団に対して大きな影響力があることを自覚し、クラスの雰囲気を良くしようとする気持ちや活動が大切なキーコンピテンシー（※）**であることを十分に理解し、様々な活動に主体的に参加してほしいと思います。今年度もよろしく、一緒に頑張っていきましょう。

（文責・進路指導部・松村）

※キーコンピテンシーとは？

「個人の成功と社会の発展にとって価値がある汎用的な能力」